

春ノリ養殖をかえりみて

ここ数年来のノリ養殖に対する関心は大変高いものがあつて、その発展ぶりは年を追つて急上昇の有様です。
しかしこの事業は生産を安定させ多くの人々に従事してもらうためには解決しなければならぬ沢山の問題があつて、そのための調査試験がまだまだ必要なのです。
次に今年の春から実施した春ノリ養殖のうち道委託事業として行つた根室、厚岸、散布各漁協の概要をお知らせしましょう。

根室 漁協

春のチシマクロノリ採苗技術はほぼ確立し人工、天然共に良い成績をあげました。その

後の発芽管理も技術的にかなり進んで来ましたが、今年は最も恐れていたヒビミドロ（俗にアオと呼んでいます）がノリ網に着生し、その駆除に少なからず努力しました。

例年より解氷がおくれ、採苗が四月下旬（例年は上・中旬）になつたことや、五月になつても水温が平年より相当低かつたためにノリの伸びは昨年より約半月から二旬もおくれました。

ヒビミドロの大発生も低水温と関係あるものと考えられます。

根室地先は例年でも厚岸湖より水温が二、三度低びのでノリの生長もおそく六月下旬か七月上旬でなければ初摘み出来ませんが今年は更におくられて七月下旬から採取されております。

その間、七月上・中旬より珪藻の着生が相当にあつて一部にドタ腐れも見られましたが、適切な管理で症状の拡大を防止しました。

人工、天然共に殆んど捨て網なしに利用出来たことは管理技術の向上と共に、比較的水の汚れが少なく漁場に波立ちがあつたこと、またコンブ生育に悪影響のあつた低水温がノリにはむしろ良かったのかも知れません。しかし栄養塩はむしろ不足気味であつたようで、ノリの色が一般に良くないようです。

試験研究の立場から見れば決して安心出来ない多くの問題はありましたが、事業的には三十八年度と同様な良好な成績を収めるものと期待されます。

厚岸漁協

厚岸湖のノリ養殖は将来道内有数の好漁場となる可能性をもつております。しかし実際にはまだ技術が天然環境をうまく利用し、またほ色々な悪条件にうち勝つて安定した生産を上る迄に至つていないと云えましょう。その点で今年の春ノリ養殖は生産が予想を非常に下廻つたのは良い反省の機会であつたと考えて良いでしょう。

まづ四月下旬に根室で採苗した網を五月六日湖内に移殖してからの生長度は根室と同様に生長初期は順調でした。しかし六月中旬になつて湖内の各漁場に病害によるノリの腐れ、脱落が起りました。その症状は健全な良く生長したノリの一部に起り順次全体に広まるのですが、まづノリが緑変し、先端部から崩れ、次第に全体が黄変しちぢれて流れ去るものです。この症状は厚岸でノリ養殖が始つて以来始めてのもので従来ノリの病気のいづれとも違つた点があります。兎に角この病害の為に全反のノリの脱落が進行し七月上旬頃には殆んど摘採不能の様相を呈しました。しかしこれだけが成績不振の原因とは云いきれないようで、厚岸湖でのノリ養殖についてはもつと基本的な漁場の整備、管理技術の確立、海水の汚れの問題など解決すべき点が多くその為には生物

散布漁協

的調査だけでなく、水の動きや性質を定期的に調査して、ノリにとつて生活しやすい環境を作つてやるのが一層大切なことだと考えられます。また徒らに採ることに追われず、まず立派に育てると言う考えをもつてこの事業に取り組むことが大事でありましょう。

火散布沼におけるノリ養殖は二・三年続けられていますが、いづれも全くの初歩的段階であつて現段階ではどれを取りあげても問題点となりましょう。養殖によつてノリが生長し、しかも摘採出来る大きさになることは今春確認されました。今後はこの湖内でのようにしたならば製品として恥しくない良いノリを作ることが出来るかと言う技術のイロハから解決せねばなりません。今春の結果から見てノリの良く伸びる水位を調べること、珪藻などの雑藻を防ぐ方法を試験すること、または沼内の利用可能な範囲を知ることが第一の目標になるでしょう。

将来おそらく沼内の改造にまでつながる大きな問題が予想されます。その点を良く認識して地道に基本となる資料を整えたいものです。